

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Minpaku Tsushin Online no.6; Cover, Contents, and others

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00009948">http://hdl.handle.net/10502/00009948</a>

みんぱく  
つうしん  
オンライン

# 民博通信

No.6  
2022

— online —



国立民族学博物館  
National Museum of Ethnology



# 民博通信

— online —

| No.6  
| 2022

## 『民博通信 Online』について

国立民族学博物館は、文化人類学や民族学研究のセンターとして、世界の諸民族の社会や文化の研究を進めるとともに、その成果を出版などのかたちで発信しています。

現在、本館では、人間文化の新たな価値体系の創出を目指す「基幹研究プロジェクト」、現代の人類社会が直面する課題の分析を目的とする「特別研究」、特定のテーマについて館内外の研究者と一緒に研究を進める「共同研究」などをおこなっています。

『民博通信 Online』は、本館において実施している個々の研究プロジェクトについて、その学術的な特色や独創的な点、導きだされた成果などを、研究者や一般の方々にわかりやすく発信する雑誌です。

## 表紙写真

ラジオ中継車の前で馬の演舞を始める男性  
※プライバシーに配慮して一部ボカシを入れています  
(詳細は本誌12-13頁)

# CONTENTS

## | Final report

**基幹研究** 海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化—東南アジア資料を中心に

### 東南アジア・オセアニア

—海辺のくらしと物質文化データベースの紹介とその制作過程  
小野林太郎 ————— 4

**基幹研究** 中央・北アジアの物質文化に関する研究—民博収蔵の標本資料を中心に

### 標本資料と現地社会をつなぐ マルチメディア・コンテンツ

寺村裕史 ————— 6

**基幹研究** データベース「焼畑の世界—佐々木高明のまなざし」の国際化と学際研究の展開

### 焼畑展示の誕生とその影響

池谷和信 ————— 8

**基幹研究** 津波の記憶を刻む文化遺産—寺社石碑データベースのフォーラム型情報ミュージアムへの改良

### 津波の記憶を刻む文化遺産

—寺社石碑データベースの今後の展望  
日高真吾 ————— 10

**基幹研究** セネガルにおける諸民族文化の映像記録を題材とする情報強化

### ソースコミュニティが作る 次世代のためのデータベース

三島禎子 ————— 12

**基幹研究** 北東アジア地域研究

### 国立アイヌ民族博物館でのピース展 (2021年10月2日—12月5日)

池谷和信 ————— 14

**基幹研究** 現代中東地域研究

### 地球規模の変動下における中東の人間と文化 —多元的価値共創社会をめざして

西尾哲夫 ————— 16

**基幹研究** 南アジア地域研究

### 南アジアの構造変動をネットワーク型共同研究 で追究する

三尾稔 ————— 18

**特別研究** デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ

### 新型コロナウイルス感染症流行中の オンラインイベント

飯田卓 ————— 20

**共同研究** 心配と係り合いについての人類学的探求

### ケアの実践とその価値

西真如 ————— 22

**共同研究** 拡張された場における映像実験プロジェクト

### 学術研究としての表現実践に向けて

藤田瑞穂 ————— 24

新刊の紹介 ————— 26

国立民族学博物館の研究 ————— 30

## 新刊の紹介

本館では、館外での出版物を奨励する制度があります。★の印は、その制度を利用して刊行された出版物です。タイトルをクリックすると詳細情報に移動します。



### アーミッシュキルトを訪ねて

—照らし出される日々の居場所へ

鈴木 七美 著

定価：2,970円（税込） 312頁 大阪大学出版会 2022年4月15日刊行

本書は、2018年に国立民族学博物館で開催された企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて—そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」（「展示記録パノラマムービー」も参照）の内容をもとに、キルトや生活用品にうつし出されたアーミッシュの暮らしと考え方を検討したものである。多様なキルトデザインやその名称、生活とのかかわりを示しつつ、アーミッシュがプレーン（簡素）でともに生きるコミュニティを創り続ける理由を、平和主義、相互扶助、教育の意味に関するかれらの信念と実践、そして現代米国社会と呼応する様相から探求した。



### 南アジアの新しい波 上

—グローバルな社会変動と南アジアのレジリエンス

南アジアの新しい波 下—環流する南アジアの人と文化

三尾 稔 編

定価：5,720円（税込）／5,280円（税込） 322頁／276頁 昭和堂  
2022年3月31日刊行

2021年度に完了した人間文化研究機構「南アジア地域研究」プロジェクトの国立民族学博物館拠点の成果論文集。「社会的レジリエンス」と文化の「環流」という2つの概念を軸に、分厚い民族誌的記述によって等身大の南アジア像を描き出す。上巻では急速に進むグローバル化のもと、社会や価値観がどのように変成・再生したかを追ひ、下巻では南アジア発の人やモノ、情報のフローが世界にどのようなインパクトを与え、さらにそれが南アジアにどのような変化をもたらしているか具体的な事例に基づいて迫っている。



### 記憶と象徴としての毛沢東

—民衆のまなざしから

韓 敏 著

定価：4,400円（税込） 344頁 臨川書店 2022年3月31日刊行

ナショナル・シンボルとしての毛沢東は、どのように社会に浸透し、民衆に受容されてきたのか。国家と地域社会による聖地作り、民間信仰、バッジの使用と題字の遍在に着目し、中華民国の孫文とベトナムのホーチミンを比較しながら、毛沢東の象徴的意味、個人崇拜の生成過程と持続するメカニズムを究明する。民衆の多角的な言説や生活実践からみえてくるのは、指導者の集团的記憶とその時代的变化である。毛沢東への人類学的アプローチは、現代中国社会を知るための新たな手掛かりとなり得るのか。

## アンデス文明ハンドブック

関 雄二 監修／山本 睦・松本 雄一 編

定価：3,740円（税込） 392頁 臨川書店 2022年4月11日刊行

本書は、アンデス文明に関する初学者向けの導入書、および大学学部生用の教科書を意図して編まれたものである。今から5000年以上前にさかのぼる壮大な神殿の出現から、16世紀に起きたスペイン人によるインカ帝国の征服、そして現代社会における文化遺産をめぐる問題にいたるまで、アンデス文明をめぐる主要なテーマが網羅され、各地で調査を進めている総勢20名の専門家によって最新の知見とともに論じられている。本書は、半世紀以上の歴史を持つ日本人によるアンデス文明研究の到達点を平易な形で提示したものと位置づけることができるだろう。



## 現代モンゴルの牧畜経済

—なぜ遊牧は持続しているのか

辛嶋 博善 著

定価：4,400円（税込） 192頁 明石書店 2022年3月31日刊行

本書は、モンゴル国の遊牧社会の2003年から2017年までを描いた民族誌である。前半では、季節移動や家畜管理といった遊牧に関わる活動の実際を、春夏秋冬に即してひとつの集団に密着して解き明かした。後半では、肉などの生産物を売却するための市場との関わり方の変化や、草原に居住して家畜を管理する集団のあり方の変化を追った。けっして低くはない生産性と社会を変化させる対応力によって、遊牧は、グローバルな経済の影響を受けながらも、今なお維持されているのである。



## 外来種と淡水漁撈の民俗学

—琵琶湖の漁師にみる「生業の論理」

卯田 宗平 著

定価：4,950円（税込） 232頁 昭和堂 2022年3月31日刊行

琵琶湖の漁師たちにとってオオクチバスやブルーギルとは何か。日本の淡水漁撈をとりまく環境が大きく変化するなか、琵琶湖の漁師たちは何を残し、何を捨て、新たに何を生みだしているのか。本書は、外来生物による生態系への影響や、新・旧技術の導入と破棄、淡水魚を食する習慣の衰退など「外来」に注目することで際立つ従来の「生業の論理」を描きだす。そのうえで、民俗学や人類学、科学史や技術史を踏まえながら民俗学の技術論に新たな解釈枠組みを提示する。





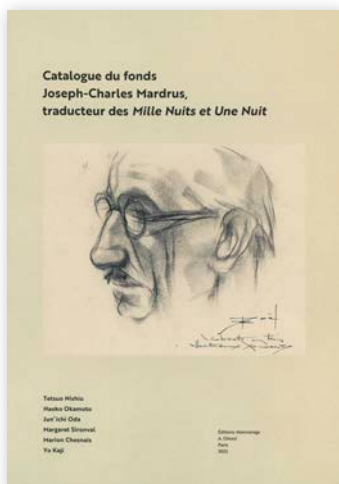


## トナカイの大地、クジラの海の民族誌 —ツンドラに生きるロシアの先住民チュクチ

池谷 和信 著

定価：4,180円（税込） 210頁 明石書店 2022年3月31日刊行

本書は、ロシア北東部に暮らす極北の民チュクチを対象にした本邦初めての本である。筆者は、1997年から2006年までに8回にわたりトナカイ飼育と海獣狩猟という経済活動を中心に現地調査を行った。その結果、ソヴィエトの崩壊後も国営農場が維持されてチュクチの牧畜と狩猟が継続してきた点、20世紀前半にチュクチがアメリカ人と毛皮交易をして銃を入手するなど、当時の社会史が明らかにされた。本書では、帝政ロシアの時代にチュクチはロシアの支配に抵抗するなど、長い時間のなかでのチュクチの過去と現在が描かれている。



## Catalogue du fonds Joseph-Charles Mardrus, traducteur des Mille Nuits et Une Nuit

Tetsuo Nishio, Naoko Okamoto, Jun'ichi Oda,  
Margaret Sironval, Marion Chesnais, and Yo Kaji

定価：40€ 266頁 Éditions Abencerage, A. Ghozzi, Paris  
2022年3月刊行

エジプト出身でフランスに帰化したジョセフ・シャルル・マルドリユスは、『千一夜物語』の訳者として有名であるが、彼の手稿や書簡など未発表作品を含む資料が遺族のもとに所有されており、国立民族学博物館の研究班が独占契約を締結し、この15年ですべての資料のデジタル化ならびにカタログ化を完了した。本書は、アラビアンナイト研究はもちろんフランス文学研究に必須文献となる。今後の研究でアラブ世界とヨーロッパ世界の文化交流の象徴的存在であるマルドリユスの個人史の解明を通して、グローバルな文学空間の実相を捉えられる。



## 憑依と抵抗

—現代モンゴルにおける宗教とナショナリズム

島村 一平 著

定価：2,420円（税込） 400頁 晶文社 2022年3月29日刊行

本書は、宗教とナショナリズムを切り口に現代モンゴルを切り取った論考を集めたものである。内容は、筆者が過去5年ほどの間で発表してきた論考を一部改変しながら再構成した。シャーマニズム、ヒップホップ、化身ラマ、民族衣装、そしてチンギス・ハーン。一見すると、とめどなく拡散しているかのように見えるテーマ群だが、実は現代モンゴルを理解する上で欠かせない「貫く論理」がある。それが「憑依と抵抗」だ。前著『ヒップホップ・モンゴリア』に続く、遊牧民と大草原といったステレオタイプを脱した新しい現代モンゴル社会論。

## 図説 世界の水中遺跡

—水底に眠る「時の証人」を求めて

木村 淳・小野 林太郎 編著

定価：2,750円（税込） 240頁 グラフィック社 2022年2月8日刊行

本書では、世界に散らばる重要な水中遺跡を厳選し、オールカラーからなる豊富な写真や図版により紹介している。近年、日本でも水中考古学や海底遺跡への関心が高まりつつあるが、世界レベルで重要な遺跡の詳細を紹介する本は本邦初となる。本書のもう一つの特徴は、日本を含むアジアやオセアニア圏で近年発見された重要な水中遺跡も多く紹介している点で、世界的にも初の試みである。古代から第2次世界大戦までを対象に、時代・テーマ別に5章構成とした。どこから読んでも楽しく学べる本である。

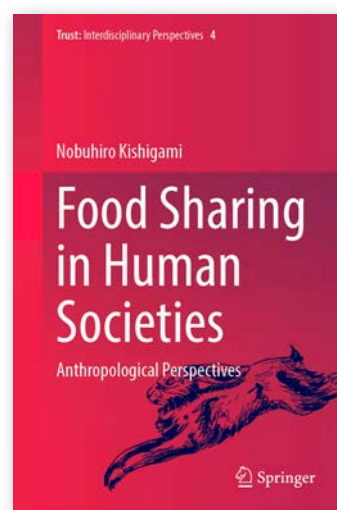


## Food Sharing in Human Societies: Anthropological Perspectives

Nobuhiro Kishigami

定価：ハードカバー \$119.99 / e-book \$109 175頁 Springer  
2022年1月1日刊行

食物は動物が生きていく上で不可欠な資源のひとつである。人間と一部の霊長類を除けば、動物の成獣間では食物を分かち合うことはほとんどないため、食物分配は人間の行動の特徴のひとつといえる。本書では、極北地域の狩猟採集民の食物分配を事例として紹介し、ほかの地域の狩猟採集民の事例と比較することによって食物分配とは何かを考える。筆者は人間の食物分配の中心的な形態は「与える」ことであり、そのやり方には時代差や地域差など多様性が見られるものの、社会的・文化的・経済的・政治的な複合的な効果があると主張する。



## 視覚障害のためのインクルーシブアート学習

—基礎理論と教材開発

茂木 一司・大内 進・多胡 宏・広瀬 浩二郎 編

定価：3,520円（税込） 376頁 ジアース教育新社 2021年12月27日刊行

本書のタイトルをみて、「自分には関係ない」と感じる人が多いのではなかろうか。では、以下のように定義してみたらどうだろう。「視覚障害＝視覚に頼らない生活様式」「インクルーシブ＝多数派と少数派の垣根を取り払う」「アート＝多様な自己表現の手段」。本書は、各地のミュージアムで実践されている視覚障害者向けの鑑賞プログラムの事例、盲学校における美術教育の現状と課題を整理した報告集である。「見る／見せる」ことを大前提としてきた従来の美術教育のあり方を根本から問い直す意欲的な論文が多数収録されている。近年、「誰一人取り残さない社会」という語をよく耳にする。「誰が誰を取り残すのか」と考えると、そこに強者と弱者の二項対立、近代的な人間観が看取できる。本書は、マイノリティが主導する新たな「ソーシャル・インクルージョン」の試みともいえる。本書を通じて、「取り残さない」という語に潜む欺瞞と危うさを実感していただければ幸いである。





## ■ 基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構は、人間文化の新たな価値体系の創出をめざして、国内外の研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進しています。機関拠点型・広領域連携型・ネットワーク型の3つの類型から構成され、本館でもそれぞれのプロジェクトに取り組んでいます。

	プロジェクト名	研究代表者	研究期間（年度）
拠点型プロジェクト／フォーラム型人類文化アーカイブズの構築にもとづく持続発展型人文学研究の推進			
基盤型	オーストラリア先住民の物質文化に関する研究 — 民博収蔵の学術資料を中心に	平野智佳子	2022-2025
	日本人の太平洋収集に関する総合的アーカイブズの構築	丹羽 典生	2022-2025
推進型	徳之島・奄美大島の芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムのデータベースを基盤とした芸能研究の推進とその成果としてのマルチメディア番組及び展示の制作・公開	笹原 亮二	2022-2023
	第一次東南アジア稲作民族文化総合調査のアーカイブス構築 — タイの写真資料を中心に	平井京之介	2022-2023
	台湾研究デジタル統合アーカイブの構築	野林 厚志	2022-2023
広領域連携型プロジェクト			
	地域文化の効果的な活用モデルの構築（「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」内のユニット）	日高 真吾	2022-2027
ネットワーク型プロジェクト			
	グローバル地中海地域研究	西尾 哲夫	2022-2027
	環インド洋地域研究	三尾 稔	2022-2027
	海域アジア・オセアニア研究	小野林太郎	2022-2027
	東ユーラシア研究	島村 一平	2022-2027

## ■ 特別研究

「現代文明と人類と未来 — 環境・文化・人間」を統一テーマとし、環境、食、文化衝突、文化遺産、マイノリティ、人口問題という課題にかんして、それぞれ3年の研究期間を設定し、国際シンポジウムや欧文での成果刊行を行い、研究を実施しています。この研究を通じて、現代文明を人類学的な視座から再検証することを目的としています。

研究課題	研究代表者	研究期間（年度）
ポストナショナリズム時代の博物館の挑戦 — 先住民族の文化をいかに展示するか	鈴木 紀	2022-2024
不確実性の時代における家族の潜勢力 — モビリティ、テクノロジー、身体	森 明子	2021-2023
コロナ禍に対するローカルな対処としての「文化の免疫系」に関する比較研究	島村 一平	2020-2023
グローバル地域研究と地球社会の認知地図 — わたしたちはいかに世界を共創するのか？	西尾 哲夫	2020-2022
パフォーミング・アーツと積極的共生	寺田 吉孝/ 福岡 正太	2018-2022

## バックナンバーのご案内



「民博通信 online」  
No.1  
2020年3月31日発行



「民博通信 online」  
No.2  
2020年9月30日発行



「民博通信 online」  
No.3  
2021年3月31日発行

## ■ 共同研究

特定のテーマについて、館内外の専門家を数人から20人程度集めて研究会をひらき、成果をあげる研究活動です。

●は館外の代表

	研究課題	研究代表者	研究期間 (年度)
一般	課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究		
	アジアの狩猟採集民の移動と生業 — 多様な環境適応の人類史	池谷 和信	2022-2024
	グローバル資本主義における多様な論理の接合 — 学際的アプローチ	中川 理	2022-2024
	ミックスをめぐる帰属と差異化の比較民族誌 — オセアニアの先住民を中心に	山内由理子	2022-2024 ●
	現代アジアにおける生殖テクノロジーと養育 — ジェンダーとリプロダクションの学際的比較研究	白井 千晶	2021-2023 ●
	被傷性の人類学/人間学	竹沢尚一郎	2021-2023
	観光における不確実性の再定位	土井 清美	2021-2023 ●
	日本列島の鵜飼文化に関するT字型学際共同アプローチ — 野生性と権力をめぐって	卯田 宗平	2020-2022
	戦争・帝国主義と食の変容 — 食と国家の関係を再考する	宇田川妙子	2020-2022
	海外フィールド経験のフィードバックによる新たな人類学的日本文化研究の試み	片岡 樹	2020-2022 ●
	環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究 — 人類史的視点から	岸上 伸啓	2020-2022
	月経をめぐる国際開発の影響の比較研究 — ジェンダーおよび医療化の視点から	新本万里子	2020-2022 ●
	不確実性のなかでオルタナティブなコミュニティを問う — モノ、制度、身体のからみあい	森 明子	2020-2022
	「描かれた動物」の人類学 — 動物×ヒトの生成変化に着目して	山口未花子	2020-2022 ●
	グローバル化時代における「観光化/脱-観光化」のダイナミズムに関する研究	東 賢太郎	2019-2022 ●
	島世界における葬送の人類学 — 東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較	小野林太郎	2019-2022
	社会・文化人類学における中国研究の理論的定位 — 12のテーマをめぐる再検討と再評価	河合 洋尚	2019-2022 ●
	人類史における移動概念の再構築 — 「自由」と「不自由」の相克に着目して	鈴木 英明	2019-2022
	食生活から考える持続可能な社会 — 「主食」の形成と展開	野林 厚志	2019-2022
	オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究	風間 計博	2018-2022 ●
	統治のフロンティア空間をめぐる人類学 — 国家・資本・住民の関係を考察する	佐川 徹	2018-2022 ●
	カネとチカラの民族誌 — 公共性の生態学にむけて	内藤 直樹	2018-2022 ●
	伝統染織品の生産と消費 — 文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐる	中谷 文美	2018-2022 ●
	グローバル時代における「寛容性/非寛容性」をめぐるナラティブ・ポリティクス	山 泰幸	2018-2022 ●
	ネオリベラリズムのモラルリティ	田沼 幸子	2017-2022 ●
	人類学/民俗学の学知と国民国家の関係 — 20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス	中生 勝美	2017-2022 ●
課題2：本館の所蔵する資料に関する研究			
国立民族学博物館所蔵木製品標本資料にもとづく森林資源利用史の研究 — 桶と樽に着目して	落合 雪野	2022-2024 ●	
民博所蔵東洋音楽学会資料に基づく日本民俗音楽の再構成と再活性化	植村 幸生	2021-2023 ●	
日本人による太平洋の民族誌的コレクション形成と活用に関する研究 — 国立民族学博物館所蔵朝枝利男コレクションを中心に	丹羽 典生	2021-2023	
沙流川調査を中心とする泉靖一資料の再検討	大西 秀之	2019-2022 ●	
博物館における持続可能な資料管理および環境整備 — 保存科学の視点から	園田 直子	2017-2022	
若手	課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究		
	伝承のかたち「触れる」プロジェクト — 「3Dプリント×伝統素材・技法」のアプローチから	宮坂 慎司	2021-2023 ●
	先住民と情報化する社会の関わり	近藤 祉秋	2020-2022 ●
	感性と制度のつながり — 芸術をめぐる「喚起」と「評価」のプロセスから考える	緒方しらべ	2019-2022 ●
モビリティと物質性の人類学	古川不可知	2019-2022 ●	



「民博通信 online」  
No.4  
2021年9月30日発行



「民博通信 online」  
No.5  
2022年3月31日発行

# 民博通信

— Online —

No.6

2022

『民博通信 Online』 No.6 (旧『民博通信』通巻170号)  
2022年9月30日

## 編集委員

卯田 宗平 (編集長)

伊藤 敦規

岡田 恵美

樫永 真佐夫

## 編集・発行

人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511

大阪府吹田市千里万博公園10-1

電話：06-6876-2151

<https://www.minpaku.ac.jp/>

## 制作

株式会社 遊文舎